

八郎湖再生目指そう

潟上市 環境改善へ意見交換



八郎湖再生を地域住民とともに考える「みんなが笑顔! 未来の湖フォーラム」(県主催)が三十日、潟上市の昭和公民館で開かれた。地元天王小、大久保小に加え、茨城県・霞ヶ浦での水質浄化活動に参加している石岡市立石岡小の児童を招き、パネルディスカッション

ションなどを通じて環境改善へ意見を交わした。

フォーラムには小学生や学校関係者、地域住民ら約百五十人が参加。湖の再生という共通の目的を掲げた子どもたちが主役となり、三校の六年生が日ごろの取り組みや考えを発表した。

天王小は、米作に八郎湖の水が大切な役割を果たしているとした上で、水質浄化作用のある水生植物の観察会、湖岸への水草移植に参加した様子を発表。石岡小は、霞ヶ浦汚染の原因に生活排水流出や逆水門設置を挙げたほか、絶滅しかけていた動植物の再生を目指して造った「ビオトープ(生物のすみ場所)」と呼ばれる池の様子を紹介した。また大久保小も石岡小

と同様、校内にビオトープを造っており、「植物や土、生き物の力で水がこんなにきれいになると思わなかった。ぜひ八郎湖の環境浄化にいかしたい」と述べた。

「よみがえれ! 豊かな湖!」と題したパネルディスカッションでは、霞ヶ浦で早くから自然再生活動に取り組むNPO法人アサザ基金代表理事の飯島博さんがコーディネーターを務めた。

「八郎湖はきれいになると思っか」という飯島さんの問いに、天王小の男子は「生活排水がたくさん流れるとしたら、努力してもきれいにならない」と、ただ一人異を唱えた。これに対し石岡小の女子が「八郎湖では大郎湖や霞ヶ浦はよみがえれると思う」と呼び掛けた。

「秋田魁新報」06年8月3日(木)

地方点描

龍とカッパ

大瀧村の干拓後、汚染が進む一方の八郎湖をどうするか。現代の環境問題が凝縮された重い問いに対する答えは、容易に見つからない。そこに風穴を開けるようなフォーラムが先月末、潟上市で開かれた。

八郎湖を取り巻く水系や社会システムの在り方を、そこで暮らす地域住民とともにとらえ直し、湖を再生しようという県のプロジェクトの一環。ユニークなのは、未来を担う小学生を主役に据えた点だ。副題は「龍とカッパの交流会」。

ここでは龍を秋田の小学生、カッパを茨城の小学生に例えた。龍は八郎太郎を指し、カッパとともにそれ

だんだんいなくなる。子どもの方は成長し、新しい子どもが生まれ、やがてみんながきれいになるようになる。八郎湖については、誰もが水質浄化を願っているとして「絶対きれいになると思う」。あまりにストリートな物言いに、会場が沸いた。

言い訳ばかりが先に立ち、否定的な考えに縛られた大人たちなんてほっとおこう、という宣言にも聞こえた。日ごろから授業で生き物と対話を重ね、環境を考える力を養っている子どもたち。夢や想像力を武器に、どんな物語を紡ぐのか。重い腰を上げるべき大人は多い。

(南秋田支局長・渡辺歩)